

IRCAD に学ぶ LSC テクニク

竹山 政美/野村 昌良 編著

＜書評者＞ 寺地 敏郎（東海大学医学部外科学系泌尿器科教授）

TVM と比較して、LSC の最も大きな利点は見える手術であることと思う。術野の解剖が全て見える。自分が行っている手技が全て見える。適応を間違えず、自分の行いたい手技を遂行する十分な技術があれば、全てが見えることは外科医にとって何より安心である。そして、特記すべき本書の特徴は、LSC の手術のとき見えるものの全てを、見なければならぬものの全てを見ることができる点である。活字とわずかな写真と図だけでは、読む人の想像力の豊かさによって見えてくるものが限られる。ビデオだけでは、見る人の能力の範囲でしかものは見えない。本書は必要十分な写真を網羅し、その写真の術野を作る助手の手技まで言及し、かつ手術の DVD も付いている。LSC をこれから始める人も、始めてみたがわかったつもの角でつい立ち止まってしまう人もその都度、本書を手にとられることをお勧めする。

さあ、本書を手にとり開いてみよう。本書には筆者らの、フランス式ともアメリカ式とも異なる、より繊細で美しい“日本式”LSC を作り上げようとする熱い気持ちが詰まっている。

第 1 章の筆者二人の IRCAD の経験は、IRCAD にすぐにも行きたい気持ちにさせるが、同時にトレーニングへのモチベーションを高めてくれる。第 2 章の LSC の歴史とコンセプトでは LSC の適応

について触れている。手術の成否の鍵の第一は適応を間違えないことであり、手術の基本のキである。

第 3 章のタイトルは“LSC に必要な解剖”である。単なる局所解剖ではなく、それぞれの解剖学的構造が LSC のどのステップで、どの手技で絡んでくるか、何に注意すべきかを詳細に述べてある。写真だけでなく、所要所のシェーマがキモを明確に示していて秀逸である。第 4 章の使用器具の選択にはそれぞれ筆者の選択理由も述べられている。自分の手技と器具を組み立てる参考になる。

第 5 章では LSC の基本となる“子宮全摘を伴う術式に即して”、LSC の流れを解説してある。ところどころに置かれた“！ Point”は、陥りやすい過ちとその回避のコツを述べている。これすなわち、筆者が過去に落ちた罌であり、これから始める人達への心底のメッセージである。

第 6 章は 4 つのパートからなり、難易度の高い、しかし避けて通れない手術である。まず、若年者に対する“子宮温存付属器温存術式”について、次に手術既往のある“陰断端脱に対する術式”について、続いてこれこそ LSC の活躍の場といえる“直腸脱合併”例に対する術式が語られる。直腸脱合併症例は fresh case と経肛門直腸脱手術の再発症例 2 例の 3 パターンについてそれぞれ解説してある。細部の処理に迷うとき、ありがた

いページである。4 番目は“TVM 術後の子宮脱”例に対する手術であるが、術式の選択については筆者らの並々ならぬ自信がうかがえる。また、この章には Column 1, 2 として“LSC の安全装置-薄膜の理解”と“オクトパスとワンタッチ内視鏡固定器ロックアームの活用”がある。Column 1 は LSC のみならず腹腔鏡手術の基本であり、Column 2 は第 2 助手の代わりとなるばかりでなく、LSC に極めて有用な器具の紹介である。

第 7 章には本書のエビデンスともいえるべき筆者ら先達の LSC の初期成績が述べられている。LSC 術後の LUTS についても、TVM との比較成績が記載され、患者さんへの informed consent を得る際の参考となる。

最後の第 8 章に亀田総合病院ウロギネコロジーセンターでの研修プログラムがあり、これから始める人達のトレーニングにより指標となる。また、この章には腹腔鏡下の縫合結紮トレーニングについても簡単に記載がある。加えて、動画の DVD もある。筆者らの LSC に対する強い熱意がここにはある。利用しない手はない。

最後に一言。これから LSC を始める人は、是非とも日本泌尿器内視鏡学会あるいは日本内視鏡外科学会が主催する、縫合結紮トレーニング一日コースを受講していただきたい。縫合結紮のコツもその後のトレーニングの方法も身につく。

● B5 頁 160 2016 年 1 月

定価：本体 15,000 円＋税

[ISBN978-4-307-43058-6]

金原出版刊